

飯綱高原でミンミンゼミ



大塚 孝一

昨年（平成22年）の夏、「セミの鳴き声を聞くのが遅い」、「あまり鳴かないが」という問い合わせがいくつかありました。温暖化や異常気象によってセミにも影響が出ているのかもしれませんが。

長野県には12種類のセミが生息しています。そのうち研究所敷地内（標高約1,000m）で鳴くセミは主に4種類、6月ごろにエゾハルゼミ、7月の中ごろから8月にかけてヒグラシやエゾゼミとコエゾゼミです。冷涼な飯綱高原では、今までミンミンゼミの鳴き声は聞いたことがありませんでした。しかし昨年はじめて研究所敷地内で複数の職員がミンミンゼミの鳴き声を聞きました。昔から私はセミに興味を持ち、注意をはらってききましたが、飯綱でミンミンゼミを聞いたのは、研究所に勤務し始めた平成13年以降の10年間で初めてです。（アブラゼミは一昨年あたりから聞いており、昨年はかなりの個体数を聞きました）。ミンミンゼミを最初に聞いたのは平成22年8月16日9時37分頃、ほぼ同じ場所で3個体。その後、8月17、

18、19、23、25、28、29、30、31日、9月3日と継続して1～2個体の鳴き声を聞きました。ぬけがらを探しましたが、エゾハルゼミ、エゾゼミ、コエゾゼミだけで、ミンミンゼミが敷地内で繁殖した証拠は見つけれませんでした。しかし近隣の飯綱東高原でも昨年はじめてミンミンゼミを聞いたとの情報があり、付近で繁殖している可能性が高いと考えています。

ミンミンゼミはそれほど移動能力があるわけではなく、また産卵して成虫になるまで平均7年かかるとされています。たまたま飛来したものが産卵したとしても、7年前ということになります。近年植樹などはしていませんので植木に幼虫がついて来たとも考えにくく、やはり徐々に生息地の標高をあげているのかもしれませんが。南信で定着してきている暖地のクマゼミの鳴き声が長野市内で聞かれるようになるのも遠いことではないかもしれません。皆様も、身近なところでセミの鳴き声に注目していただければ幸いです。

コラム

COP10と地域のとりくみ

～これからの10年にむけて～

須賀 丈

昨年秋、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が開かれ、遺伝資源に関する「名古屋議定書」、生態系保全に関する「愛知目標」など多くの文書が採択される成果をあげました。これらは身近な環境にどう関わるのでしょうか。

地域の自然と暮らしをグローバル化した世界でどう守るか。これが生物多様性をめぐる議論の核心にあります。COP10は政府間交渉の場でした。しかしNGO・研究者・企業・地方自治体・先住民の代表なども参加し、その意見は政府間のいくつかの合意文書にも反映されました。具体的な問題が語られるとき、それはほぼつねに地域の自然と暮らしに関わるものでした。

採択された愛知目標は、「遅くとも2020年までに、生物多様性の価値とそれを保全し持続可能に利用するための行動を、人々が認識する」など20の個別目標を掲げています。これらを実現する場合は、地球上

のそれぞれの地域です。

長野県では今、生物多様性地域戦略の策定を進めています。当研究所ではその基礎となる報告書を作成しています。地域戦略は、信州の風土の特色に即しながら、行動の成果を愛知目標の達成につなげるものであることが求められます。今後にご注目ください。



COP10での政府間交渉の様子